

国語科教育における絵本活用についての考察 -教育のデジタル化を踏まえて-

宇賀神 葵衣

2000年以降の日本において、主に若者を読者とするケータイ小説が流行し、出版社が共同で電子書籍販売サイトをオープンするなど、インターネット上でのデジタル形態の読み物が増え、電子コミックを筆頭に電子書籍市場は拡大している。絵本に関しても最初からデジタル形態で作成される作品の増加や、オリジナルのデジタル絵本を無料で読むことのできるサイトの誕生が見られる。教育分野においてもデジタル化が進んでいる。文部科学省は2019年に「GIGAスクール構想」を提唱し、1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、個人個人に適した学習を進め、IoTやビッグデータ等の新たな技術の進展に対応するための教育を行うことを目標とした。この構想の下、授業ではICTが積極的に活用されるようになり、教科書のデジタル化などが行われている。

本研究では、日本における子ども向けの読み物、教育のデジタル化の動向を踏まえつつ、絵本を教材とした教育の方策と課題を考察するため、教科書に掲載された絵本作品とオリジナル絵本の相違の調査と、国語科教育におけるデジタル読み物の活用事例に関する調査を行う。1つ目の調査では、絵本の表現方法に関する先行研究を基にA. 絵の表現方法、B. 文章表記、C. 絵とことばの関係性に着目して比較を行った。2つ目の調査では、小学校で実際に行われたICTを活用した国語の授業事例を収集し、ICTの使用目的や使用している機器・システムに関して整理を行い、その中で絵本作品がどのように授業で利用されているのかについて調査を行った。

本研究の結果、オリジナル絵本を教科書に掲載する際に、絵よりも文章を重視した構成をとっており、紙面の形状も大きく異なるため、オリジナル絵本が本来持つ表現方法を教科書で表現することは難しいということが明らかになった。また、ICTを活用した国語科授業では、教科書や教室にとどまらない学習環境を整えることが可能になることが明らかになったが、絵本を用いた授業事例は少なく、デジタル化された絵本を教育で活用できるような形式で提供するサービスにおける作品数も現時点では十分ではない。今後は、デジタル化された絵本とオリジナル絵本を用いた表現方法に関する比較を行ったうえで、子どもたちがより多面的に、日常的に絵本作品に触れることのできる学習環境を整え、絵本独自の表現方法を学ぶことができるような方策を考えていく必要があることを読書教育の観点から提言している。

(指導教員 原 淳之)